

# 「性奴隷」など

故小野田寛郎

小野田自然塾理事長

# どこにもいなかつた



## 「従軍慰安婦」は造語

首相の靖國神社参拝や従軍慰安婦の問題は、全く理由のない他国からの言いがかりで、多くの方々が論じているところだ。南京大虐殺と同様、多言を弄することもあるまいと感じていたのだが、未だに妄言・暴言が消え去らない馬鹿さ加減に呆れる。

戦後六十年、大東亜戦争に出征し、

戦場に生きた者たちが少なくなりつつある現今、私は証言として、「慰安婦」は完全な「商行為」であったことを書き残そうと考えた。

外地に出動して駐屯する部隊にとつて、治安維持と宣撫工作上最も障害になる問題は、兵士による強姦と略奪・放火である。そのためにこの国もそれなりの対策を講じていることは周知のとおりである。

大東亜戦争時、戦場には「慰安婦」

はたしかに存在した。当時は公娼が認められている時代だったのでから至極当然である。

野戦に出征した将兵でなくとも、一般に誰でも「従軍看護婦」や「従軍記者」という言葉は常識として知っていたが、「従軍慰安婦」という言葉は聞いた者も、また使った者もいまい。私も聞いたことがない。それは日本を貶めるために後日、作つた造語であることはたしかだ。

## ●「従軍慰安婦」の正体

淫らな言葉だが、中国戦線では「ツンコ（中国）・ピー」「チョウセン・ピー」と呼んでいたはずであるが、売春は誰も他の人の見ている所でするはずのないことだけに、仲間同士の話はあからさまでも、公衆の面前で手柄顔に大声で事細かに話せる者はまずいないだろう。陰で笑い者にされるのがオチだからだ。

そのためか、「慰安所」のことも「慰安婦」のことも、公の場で自己の見聞を正確に発表する人が少ない。「ピー」は中国戦線で兵士たちが隠語として使ったのだから語源は中国語で、女性の秘部の意で戦場からの帰還兵から日本内地にも伝わっていた。曰く、「ピー買い」である。

それはともかくとして、あまり詳しくいと「よく知ってるね」と冷笑されるのがオチだろう。「ではなぜ、君

は」と私に聞かれるだろうが、幸い私はその実態を外から観察できる立場にあつたから、何も臆することなく、世の誤解を解くために発表することができるとだ。

### 漢口の「慰安所」を見学

私が初めて「慰安婦」という言葉を聞いたのは、「慰安所」からだつた。

昭和十四年、商社員として十七歳の春、中国揚子江中流の漢口（現武漢）に渡つた私は、日本軍が占領してまだ五カ月しか経っていない、言わば硝煙のにおいが残っているような街に住むことになつた。

当時、漢口の街は難民区・中華区・日華区・フランス租界・日本租界・第一特別区（旧ドイツ租界）・第二特別区（旧ロシア租界）・第三特別区（旧英国租界）に分かれていて、地区

ごとにそれぞれ事情に合つた警備体制が敷かれていた。

日本兵の歩哨ほしやうや憲兵、安南兵の歩哨（フランス租界）、中国人の巡查もそれぞれの場所に立っていた。日華区とは日本人と中国人とが混じつて住んでいる地区で、そこに住む中国人は中華区に住む者と同様、「良民証」を携帯しており、そうでない者は警備上、難民区に住まわされていた。

難民区は日本兵も出入りを禁止されていて、私たちが在留邦人は届け出て許可を得なければ出入りできなかった。それだけ危険な場所だつた。

私は仕事が貿易商だから、難民区以外はよく歩いた。ある日、汚れた軍服を着た兵士に「慰安所はどこか知りませんか」と路上で尋ねられて一瞬、思い当たらずに戸惑つた。しかし、看板に黒々と「漢口特殊慰安所」

と書いて壁に掲げていて、その前に歩哨と「憲兵」の腕章をつけた兵隊が立っている場所を思い出したので、そのとおりに教えてあげた。映画館と同様に日華区にあった。汚れた軍服から推測して、作戦から帰ってきた兵士に間違いない。街を警備している兵士は、そんな汚れた軍服で外出していないからだ。

私は「特殊慰安所」か、なるほど作戦から帰った兵士には慰安が必要だろう、小遣い銭もないだろうから無料で餅・饅頭・うどんその他がサービスされるのだろうかとうと早合点していた。

ところが、私の知人が営む商社は日用品雑貨の他に畳の輸入もしていて、それを「慰安所」にコンドームなどと一緒に入れているので「慰安所」の出入りが自由であった。彼に誘

われて、一般在留邦人が入れない場所だから、これ幸いと見学に行った。

漢口の街の大通りには、ところどころ入り口の壁に「〇〇洞」「〇〇里」と書かれた横丁がある。日本の裏長屋に相当する住宅街である。先に私が兵隊に教えた場所の名は「積慶里」であった。

### 一日二十七人の客を

私たちは、憲兵に集金の用件を話して中に入り、まず仕事を済ませた。日が暮れていたので「お茶つびき」客のない暇な遊女が大勢出てきて、経営者と私たちの雑談に入ろうとしてきたが追い払われた。

そこには内地人も鮮人も中国人もいた(現在、鮮人は差別用語とみなされ、使われない。しかし、朝鮮半島が日本統治だった当時は「日本人、朝

鮮人」などと言うものなら彼らに猛烈に反駁された。彼らも日本人なのだからという理由である)。

群がってきた彼女たちは、商売熱心に私たちに媚びてきた。憲兵は特別な事情の時以外は、部屋のなかまで調べに来ないからである。

料金は女性の出身地によって上中下がある。また、利用時間も兵士は外出の門限が日没までだから日中に限られるが、下士官は門限が長く、将校になれば終夜、利用できる。料金も同額ではない。階級の上のほうが割高で、女性たちは当然、同じ時間で多く稼げることになる。

半島出身者に「コチヨ(伍長―下士官)かと思つたらヘイチヨウ(兵長―兵士)か」「精神決めてトットと上がれネタン(値段)は寝間でペンキヨウ(勉強)する」とか、笑うどころ

## ●「従軍慰安婦」の正体

ではない涙ぐましいまでの努力をし  
ているのも聞いた。内地人のある娼  
妓は、「内地ではなかなか足を洗えな  
いが、ここで働けば半年か一年で洗  
える」といい、なかには「一日に二十  
七人の客の相手をした」と豪語する強  
者もいた。

### 月給の三分の一を使った

ここで、親しくなった経営者の話  
を紹介しよう。

「内地人も出身地の異なる他の女の  
子も、体力的に大差がないはずなの  
に、内地人は兵士たちと言葉が通じ  
るために情が通うのか、本気でサー  
ビスして商売を忘れ、健康を害して  
しまう。そのために送り返さねばな  
らず、経営者にとって利益が少なく  
兵隊さんには内地人ばかりで営業す  
るのが本のだが」と本音を漏らしてい

た。

私の育った街には花柳界があつた  
ので、芸妓と酌婦をよく眼にしたが、  
大都市ではない田舎町には娼妓はい  
なかつた。当時は玄人女と呼ばれた  
彼女たちの外出姿でも、一般の女性  
と見分けることができた。その目で  
見れば漢口の街でも同様だつたが、  
特に朝鮮人の女たちは特色があつた。

というのは、彼女たちは数人で外  
出してくるのだが民族衣装ではな  
く、着慣れないツープースの洋装の  
せいで着こなしが悪く、また歩き方  
にも特徴があつて一目で見分けられ  
た。スカートの下から下着の裾が覗  
いている人も多かつた。なにかユー  
モラスだつたが、そんなことに関係  
なく彼女たちは実に明るく楽しそう  
だつた。

その姿からは、いまだきおおげさ

に騒がれている「性的奴隷」に該当す  
ような影はどこにも見出せなかつ  
た。

たしかに、昔からの言葉に「高利貸  
しと女郎屋の亭主は畳の上で往生出  
来ぬ」というのがあつた。

明治時代になつて人身売買が禁止  
され「前借」と形は変わったが、娘に  
とつては売り飛ばされたことに変わ  
りはなかつた。先述の「足を洗う」と  
は前借の完済を終えて自由の身にな  
ることを言うのだが、半島ではあく  
どく詐欺的な手段で女を集めた者が  
いる、という話はしばしば聞いた。

騙された女性は本当に気の毒だ  
が、なかにはこんな話もある。「従  
軍看護婦募集」と騙されて慰安婦にさ  
れた。私は高等女学校出身なのに」  
と、兵士や下士官を涙で騙して規定  
の料金以外に金をせしめているした

たかな女もいた。また、それを信じ込んでいた純な兵士もいたことも事実である。日本統治で日本語が通じたゆえの笑えない喜劇でもある。

ところで、その「慰安所」にどれだけの金 flowed のだろうか。これが「慰安婦」が「商行為」であったたしかな事実である。

私の次兄が主計将校で、漢口にある軍司令部に直接関係ある野戦衣糧廠（いりょうしやう）にいたので「慰安所」について次のような統計があると教えてくれた。

当時、漢口周辺には約三十三万人という兵力が駐屯していたが、ある理由で全軍の兵士の金銭出納帖を調べた。

三分の一が飲食費、三分の一が郵便貯金、三分の一が「慰安所」への支出だった。

貯金をすることは給料の僅かな兵

士たちにとってあまり嬉しいことではなかったが、上司から躰（しん）として教えられている手前、せざるを得なかったのが実情だった。

私も初年兵として一カ年、江西省南昌にいたが、食べたいのを我慢して貯金した。

一人の兵士がそれぞれ三等分して使ったわけではないだろうが、人間の三大欲は食欲と睡眠欲と性欲と言われるだけに、貯金を睡眠に置き換えると全く物差しで測ったような数字である。

### どう考えても商行為

ちなみに、当時の給料は兵は一カ月平均十三円ほどで、その三分の一を約四円として計算すると、三十三万人で総額約百三十二万円になる。

「零戦」隼」といった戦闘機一機の価

格は三万円と言われたが、実に四十機分にも相当する。サラリーマンの初任給が四十円そこそこの頃だったのだから、経理部の驚くのも無理のない話である。

以上が、私が商社員として約三年半の間、外部から眺め、また聞き得た「慰安所」と「慰安婦」の実態である。

私が漢口を去った昭和十七年夏以降に、漢口兵站（へいたん）（作戦軍の後方にあつて車両・軍需品の前送・補給・修理・後方連絡線の確保などに任ずる機関）の副官で、「慰安所」等を監督した将校の著した『漢口兵站』と照合してみたら、地名・位置等について多少の相違点は見出したが、本題の「慰安所」について相違はなく、より内情が詳しく記されていた。

これでは、誰がどう考えても「商行為」であるとしか言いようがないだろ

## ●「從軍慰安婦」の正体

う。「商行為」ではない、軍による「性的奴隸」であるとそれでも強弁するとすれば、知らな過ぎるのか、愚かで騙されているのか、そうでなければ

関西人が冗談めかして言う「あんた親戚だっか、それともいくらか貰うてまんの？」なのかもしれないが、あまりにも馬鹿げた話である。

### 騒ぐ連中の狙い

次に、軍閥との暴論について証言する。

私は二十歳で現役兵として入隊、直ちに中支の江西省南昌の部隊に出征した。初年兵教育が終わって作戦参加、次いで幹部候補生教育、途中また作戦とちょうど一カ年、一度の外出も貰えずに久留米の予備士官学校に入校してしまつたから、外出して「慰安所」の門を潜る機会に恵まれ

なかつた。

だが初年兵教育中、古い兵士には外出がある。外出のたびにお土産をくれる四年兵の上等兵に「外出でありますか」と挨拶したら、「オー、金が貯まつたから朝鮮銀行に預金に行くんだ」と笑つて返事をしてくれた。周りは周知の隠語だからクスリと笑うだけだつた。

南昌には師団司令部があつた。「慰安所」には内地人も朝鮮人も中国人もいて、兵士は懐次第で相手を選んで遊んだのだろう。

私は幹部候補生の教育を、南昌から三十キロ以上も離れた田舎の連隊本部で受けた。「慰安所」は、連隊本部の守備陣地の一隅に鉄条網で囲まれて営業していた。教育の末期に、候補生だけで本部の衛兵勤務（警備する勤務）に就くことになつた。も

ろろん勤務は二十四時間である。

私は管舎係だつたので歩哨に立たないから、何度も歩哨を引率して巡察に出た。巡察区域のなかに「慰安所」も含まれていた。前線の歩哨は常時、戦闘準備をしている。兵舎内の不寝番でさえ同様だ。鉄帽を被り、銃には弾を装填し、夜間はもちろん着剣である。その姿で「慰安所」の周

囲だけならまだしも屋内も巡察し、責任者の差し出す現在の利用者数の記録を確認する。軍規の維持とゲリラの奇襲攻撃を警戒しているからである。考えてみるまでもない、そこで遊んでいる兵士は丸腰どころではない。もつと無防備で不用心な姿のはずである。その將兵を守るべき責任が部隊にあるのは当然だ。それに性病予防の問題もある。そんな田舎に

医師や病院があるはずがない。性病予防のため、軍医や衛生兵が検査を実施するしかない。

「慰安所」の経営者は中国人だったし、日本では当時公認の娼妓と呼ばれた女たちも中国人だった。彼らも食料やその他の生活用品が必要だ。大人数なのだから、それなりの輸送手段もある。辺鄙な場所だから部隊に頼る以外、方法がない。部隊が移動する時もそうなるだろう。

私の話す湖北省の言葉もだいたい通じたので、経営者と立ち話をして彼女たちについてそれなりの様子も聞き出せた(勧めてくれるお茶は飲まなかったが、任務以外の会話は少々守則違反だ)。いまでも「慰安所」の両側に部屋のある中廊下を巡察した不粋な自分の姿を思い出すが、こんな漫画にもならない風景が現実にあっ

たのだ。これは私の部隊だけではないと思う。

もう六十年も昔のことである。時代が変わり、また平時と戦時の違いもある。したがって、娼妓(ここでは慰安婦に相当する)に対する解釈も当然、変化している。そうであるにもかかわらず、すでに証拠も不完全になつていることを幸いに、いまさらこれを問題にして騒ぎ出す者たちの狙いは何なのか。言えることはただ一つ、不完全だからこそ、喚き散らしていれば何かが得られると狙っているということだ。

## 戦場の「自然の摂理」

戦場に身を曝し、敵弾の洗礼を受けた者として、同じ戦友たちの名譽のために最後に言っておく。彼女たちを性的奴隷として虐げたのではな

く、それ相応の代価を支払つてのことだった、と。

このことだけはたしかだ。野戦に出ている軍隊は、誰が守ってくれるのだろうか。周囲がすべて敵、または敵意を抱く住民だから警戒を怠れないのだ。自分以上に強く頼れる者が他に存在するとしても言うのならまた話は別だが、自分で自分を守るしか方法はないのだ。

軍は「慰安所」に関与したのではなく、自分たちの身を守るための行為で、それから一歩も出ていない。

「異常に多く実を結んだ果樹は枯れる前兆」で「種の保存の摂理の働き」と説明されるが、明日の命も知れぬ殺伐とした戦場の兵士たちにもこの「自然の摂理」の心理が働くと言われる。

彼らに聖人君子か、禅宗の悟りを

開いた法師の真似をしると要求することが可能なのだろうか。現実には少ない給料のなかから、その三分の一を「慰安所」に持って行ったことで証明されている。有り余った金ではなかったのだ。

「兵隊さん」と郷里の人々に旗を振って戦場に送られた名誉の兵士も、やはり若い人間なのだし、一方にはそうまでしてでも金を稼がねばならぬ貧しい不幸な立場の女性のいる社会が実際に存在していたのだ。

買うから売るのか、売るから買う

のかはともかく、現在も夜の街に溢れているように、地球上に人間が存在する限り、誰も止めることのできないこの行為は続くだろう。根源に人間が生存し続けるために必要とする性<sup>さが</sup>が存在するからだ。

「従軍慰安婦」なるものは存在せず、ただ戦場で「春を売る女性とそれを仕切る業者」が軍の弱みにつけ込んで利益率のいい仕事をしていたというだけのことである。

こんなことで騒がれては、被害者はむしろ高い料金を払った兵士と軍

のほうではないのか。

# 最新刊! 関東大震災 「朝鮮人虐殺」は なかつた! 加藤康男

026円(税込)

「従軍慰安婦」だけではない、もう一つの歴史の捏造

WAC出版局  
東京都千代田区五番町4-5  
五番町コスモビル  
tel 03-5226-7622

おのだひろお  
一九二二年、和歌山県生まれ。貿易商社就職後、四四年、陸軍中野学校二俣分校に入校、十一月にフリーピン戦線へ派遣される。以後三十年間、終戦を信じず任務を遂行。七四年、谷口義美元少佐の作戦任務解除命令口達により、日本に帰国。翌年、ブラジル移住。八四年、小野田自然塾を開校する。著書に「小野田寛郎―わがルパン島の30年戦争―(日本図書センター)」、遺たち、どうする?」(新潮社)など。二〇一四年一月十六日、逝去。